

⑤学生の反応

230 枚をこえる学生の体験レポートでは、各学生の専攻や日常の食生活などに即した「学び」の実態が明らかとなった。下記に抜粋を記載する。

(1) 「日本型食生活」や「一汁三菜」の食生活の学びについて

- 普段の何も意識していない夕食とは違い、一汁三菜を意識すると野菜も多く、色鮮やかでバランスのよい食事をとることができるということがわかった。野菜も地域の方が作られたものもあり、共に料理をすることでコミュニケーションをとることができるとともに、安心して使用することができ、とても良いことだと感じた。そのため、これから少しずつでも季節感や色合い、バランスなどを意識して野菜を使うべきだと考えるようになった。また、役場の方も一緒に夕食を食べることになり、1歳のお子さんを連れてきていたのだが、その食事の様子がとても印象的であった。すべてのことがお子さん中心に進むようになり、その子にみんなの視線が集まっていた。その子が笑えばみんなが笑顔になり、泣き出せばみんなが困った顔をする。小さな子どもの力を感じることができ、今まで以上に子どもに関わる仕事がしたいと思うようになった。(幼年教育選修)
- 自分の日常の食生活を振り返ると、カレーライスやラーメン、パスタなど一品で済ますことがかなりある。しかし、これでは栄養バランスには問題がありそうだ。今回の経験で日本型食生活に多くの利点があることを知ったので、これからは家庭での食生活において、和食を積極的に取り入れていきたい。(情報教育)
- (農泊体験は) 近所の方から食べ物のおすそ分けがあつたりと、本当に地域の方々の温かさを感じられた二日間だった。(中略) ソーシャルワーカーの立場からすると、このように地域とのかかわりがあることで、高齢者の孤独死の問題など超高齢社会特有の問題も解決に近づくとも考えられる。(社会福祉)
- 現代の家庭環境では「こ食」が多くなっている。例えば、一人で食事する「孤食」や、決まったものしか食べない偏った食事の「固食」といったものだ。そのため、今回の体験で作った心のこもったバランスの良い家庭料理の大切さやあたたかさを多くの子供たちに実際に体験し、感じてもらうことが必要だと考える。さらに、授業で日本の和食がユネスコ文化遺産に登録されたと学んだ。和食の特徴は、多様で新鮮な食材と素材の味を活用していること、栄養バランスがよく健康的な食生活、自然の美しさと季節の表現していることである。今回の体験でいただいた農家料理は、すべて日本の和食であり、改めて日本人の伝統的な食文化のすばらしさを感じることができた。これからの学校教育の中で、食育はとても重要なものとなっていると考え、今回学んだ食事の原点を現代の子供たちに教えていきたいと考える。(生活環境)

(2) 教師の素養としての農作業・食育体験

- 今回の宿泊体験では、作物を育てることの苦労や食に対するありがたみを実感することができた。主に収穫を体験させてもらったが、収穫に至るまでには多くの苦労が含まれていて、作物を育てることは決して簡単なことではないと学んだ。私たちは普段の食事の中で、好き嫌いなどの理由で当たり前のように食事を残しているという現状がある。一つ一つの食べ物の背景には多くの苦労が含まれているということを忘れてはならないと思った。
- これからの教師は食育を行っていくことも求められている。教師自身が農業体験をして、生徒以上に食のありがたみや農作業の大変さを実感することが大切だと思う。その面においても今回の宿泊体験は貴重な経験だった。このようなとても価値のある経験の場を設けていただいたことにすごく感謝している。これからも農作業が経験できる機会があれば積極的に参加していき、将来立派な教師になれるように豊富な経験を増やしていきたい。(生活環境)